

八代郡市部村

百姓 茂 七

嘉永二酉年

同郡唐柏村

十月二十三日

百姓代澤石衛門

郡中惣代三人代兼

平右衛門

石和

専 藏

御役所

十二月十九日

一金四千五百拾三両壹分

永二百拾八文壹分

(本文略)

一月十三日(嘉永三年)

一金三千七百五拾両也

## 県庁庭園の石幢<sup>せきどう</sup>

埴原 福 貴

(本文略)

以上の様に丸山家嘉永二年一〇月より同三年二月までの「御用留」の中に、三回の江戸表御年貢金差立の記事が載っています。

恐らく何年かの間、この様な輸送方法が採られたことと思いますが、当時の交通事情(駄馬・徒歩)や警備等を考えると、よく代官所が名主を信用して大金を預託し、又、請け負った名主や百姓も、よくこの様な命がけの仕事を、わずか三両ばかりの駄賃で引請けたものだと思え、あるいは外に特別の事情でもあったのではないかと思います。思え、今後の研究課題とします。

(甲府市古文書研究会会員〓投稿)

県庁の本館と旧館の前に築かれている庭園に古色蒼然とした丈余の石幢(六地藏蔵幢)がある。築庭されたのは昭和三〇年代、当時県の土木部長だった川手良親氏(現須玉町長)の頃、この貴重な石幢が散逸するの

を怖れて、現在地に移したものと云われている。

この石幢は、須玉町大豆生田の覚林寺付近を通る信玄の棒道に建てられていたものである。

石幢は中国から伝えられた供養のための石造物で、中国と日本では形式に差異が認められるが、かつて中国で作られた一つの形式と見られるもの(応徳元年一〇八四)が京都国立博物館に収蔵されている。

県内では甲州型ともいふべき室町期の石幢が、須玉町・大泉村・高根町・長坂町・白州町等、峡北地方を中心に多く現存し、南佐久郡臼田町など信州の一部にまで分布している。県内の石幢分布について検討してみると各市町村に散在していることがわかるが、峡北地方にやや集中する傾向があるがわかる。

石幢の形式は、石燈籠状の重制幢と幢身を主とした単制幢に分けることができ、県庁庭園の石幢は重制幢に類するとみられる。現存している石幢の中で、重制石幢に属するものとしては、須玉町二日市場惣墓六地藏蔵幢(応永元年一三九四)、大泉村西井出道明六地藏蔵幢(永享六年一四三四)、高根町石田前六地藏蔵幢(永享九年一四三七)、南佐久郡臼田町十日町六地藏蔵幢(永享十二年一四四〇)、高根町北之割六地藏蔵(応仁元年一四六七)、長坂町中丸長昌寺六地藏蔵(室町中期)、白州町清泰寺六

地藏（室町中期）等があり、単制石幢としては須玉町二日市場市神石幢（応永元年＝一三九四）が現存する。

なお、須玉町誌には、須玉町三輪神社の石幢（永享七年＝一四三五。町文化財）の造立者が、聖西蓮坊と一結衆（高野山の聖号の許可を受けた西蓮坊を中心とする信仰集団）と伝えられていることが記されている。

県庁庭園の石幢は同町地内寛林寺部にあったもので、三輪神社の石幢と全くその規模を同じくしていることから、造立者は同一の信仰集団ではないかとみられる。

このように、石幢が峡北地方にやや集中してみられる原因について考えてみると、義清―義光―信義―信光等、初期の武田氏が逸見筋に居館を構えていたため、金竜山信光寺（須玉町東向）を筆頭に数多くの名利・古刹があり、この地域が京都や鎌倉との仏教文化交流の中心的役割を果たしていたことが推測されるのである。

さらに、もう一つの推測として、棒道と石幢の関係について、峡北地方の民間に伝承されている話が意外に関わりがあるように思われる。

府中を抜けて須玉・長坂、そして信州の富士見・原村から仲仙道に直結するこの棒道の目的は、限られた時間の中で、できるだけ多くの兵員を所定の所に送り込むことにあった。

往時、棒道にはこのような石幢がいくつか建てられていたと言われ、地元では古くから「信玄燈籠」と呼ばれていた。このような名称で伝承されているのは、六地藏を刻んだ石幢の形式が石燈籠によく似ているためであろう。信玄燈籠は甲州の領内から国境を越え、大門峠以西の信州にまで建てられていたと言われている。

信玄燈籠の所在する所には必ず寺があって、その寺は信玄から厚い庇護を受けてい

たという。地元では、信玄燈籠は火急の派兵で武器だけを身にまとった兵士たちに、時に食糧を供給する兵站基地の目印として、また、合戦で傷ついた将兵が後送されてきて、始めて薬の手当を受けることのできる医療基地の目印として伝えられているのである。

燈籠の高さは二メートル余り、円柱状の幢身には蓮華の花片であろうか、請花と反花が上下に浮き彫りされて、円柱は下方に下がるにしたがって太さを増し、雄渾でかつ安定している。石幢は長い歳月、周囲の歴史を滲ませたかのように、黒く沈んだ沈静さを見せて、今も県庁の庭園にそそり立っている。

（調査協力員）

## 甲府の芸能と亀屋座

飯室 るり子

古くから人々は、神への祈りや願いを体の動きと音によって表現し神とのつながりを持った。そこから舞踊と音楽が生まれ、時代を経るに従い伎楽となり舞楽・能楽・

能狂言が生まれ、江戸時代に入っては人形浄瑠璃や歌舞伎となった。甲府における芸能の形成が見られるのは、江戸時代の人形浄瑠璃と歌舞伎の普及によるものではない